

平安京左京八条四坊七町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京八条四坊七町跡

2004年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生きています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来1200年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成13年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平米から、数千平米におよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび集合住宅建設工事に伴います平安京跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げます。

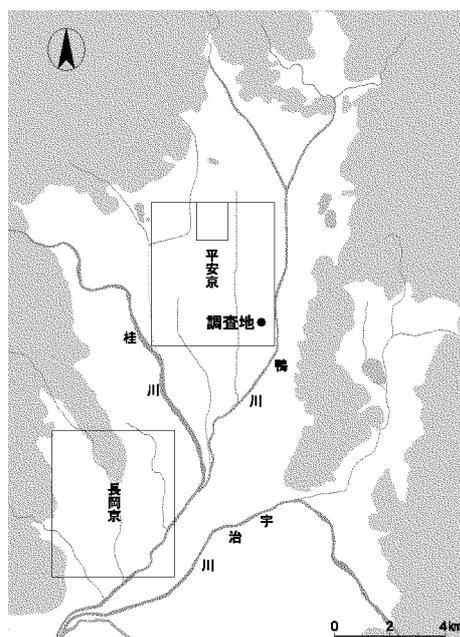
平成16年3月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京左京八条四坊七町跡
- 2 調査所在地 京都市下京区小稲荷町・上之町
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 2003年9月16日～2003年12月26日
- 5 調査面積 約430m²
- 6 調査担当者 加納敬二・永田宗秀
- 7 使用地図 図1は京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「京都駅」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系（ただし、単位(m)を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡測量基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 掲載順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 基準点測量 宮原健吾
- 16 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 17 本書作成 加納敬二
- 18 編集・調整 児玉光世・清藤玲子



(調査地点図)

目 次

1 . 調査経過	1
2 . 遺 構	3
(1) 層 序	3
(2) 遺構の概要	3
(3) 第 1 面の検出遺構	5
(4) 第 2 面の検出遺構	5
(5) 第 3 面の検出遺構	8
3 . 遺 物	10
(1) 遺物の概要	10
(2) 第 1 面の出土遺物	10
(3) 第 2 面の出土遺物	11
(4) 遺物包含層の出土遺物	15
(5) 出土銭貨	16
4 . ま と め	17

図 版 目 次

図版 1	遺 構	1 試掘調査検出護岸
		2 第 1 面溝SD 5 全景 (南西から)
図版 2	遺 構	1 第 2 面全景 (北西から)
		2 第 2 面井戸SE158 (東から)
		3 第 2 面井戸SE151 (東から)
図版 3	遺 構	1 第 3 面全景 (北西から)
		2 調査区東壁断割断面
図版 4	遺 物	第 1 面溝SD 5 出土遺物
図版 5	遺 物	第 2 面出土遺物
図版 6	遺 物	遺物包含層出土遺物

挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 5,000)	1
図 2	調査前全景 (南西から)	2
図 3	調査風景	2
図 4	基本層位図 (調査区西壁、 1 : 40)	2
図 5	第 1 面遺構平面図 (1 : 150)	4
図 6	SD 5 東壁断面図 (1 : 80)	5
図 7	第 2 面遺構平面図 (1 : 150)	6
図 8	SK105実測図 (1 : 20)	7
図 9	SE151実測図 (1 : 20)	7
図 10	SE158実測図 (1 : 20)	8
図 11	第 3 面遺構平面図 (1 : 150)	9
図 12	第 1 面出土遺物実測図 (1 : 4)	12
図 13	第 2 面出土遺物実測図 (1 : 4)	14
図 14	褐色砂礫層出土遺物実測図 (1 : 4)	15
図 15	黒色砂礫層出土石器実測図 (1 : 4)	16
図 16	銭貨拓影 (1 : 2)	16

表 目 次

表 1	遺構概要表	3
表 2	遺物概要表	10

平安京左京八条四坊七町跡

1. 調査経過

本調査は、京都市都市計画局による集合住宅建設工事に伴う発掘調査である。調査地は塩小路通高倉の北東角に位置し、平安京左京八条四坊七町跡に該当する。しかし、平安時代の居住者は知られていない。ただし当地南の四坊六町には平安時代後期に権中納言藤原顕頼の御堂が存在し、四坊五町にあたる高倉八条には太政大臣藤原実行の邸宅が在ったとされている。また西側の八条三坊一帯は、平安時代末から鎌倉時代にかけて八条院暉子内親王を領主とする「八条院町」と称される地域であった。中世を経て桃山時代には近接する高倉通に「御土居」が設けられ、当地は洛外となった。

調査地では2002年6月3日から6月24日にかけて試掘調査を行い、中世の遺構・遺物の残存状況を確認した。また氾濫堆積である砂礫層から縄文時代の石器を検出している。さらに江戸時代から明治時代まで機能していた旧高瀬川の南西方向の流れの北肩部を確認した。それらの成果をもとに、発掘調査を2003年9月から2003年12月まで行った。調査区の設定に際しては、計画建築物の範囲に合わせて、やや変則ではあるがL字型とした。機械掘削は地表下約1mの江戸時代にあたる第1面近くまでとし、以下を人力で順次掘り下げ調査を進めた。また砂礫層の堆積が厚いことから、安全面に留意し、調査区の周壁を安定した状態で確保するため、地表下約1mで壁沿いに幅約1mの控えを設け、脆弱な堆積土に対応した。また第2面の調査においては、南西部で

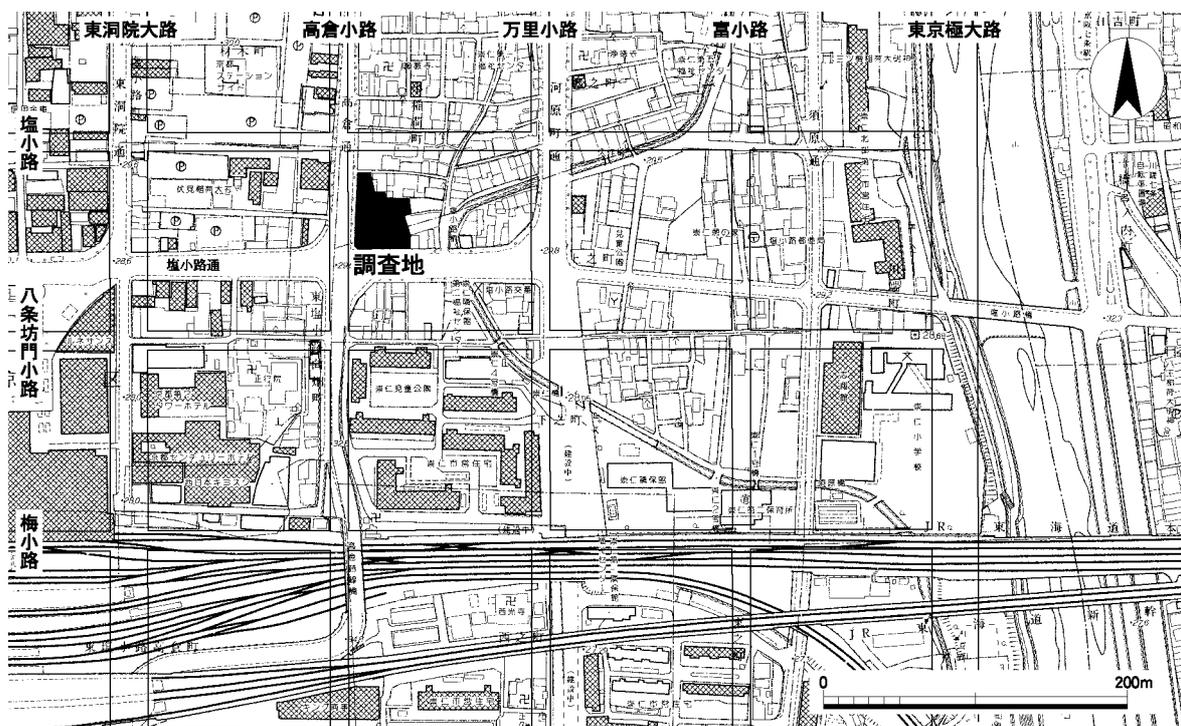


図1 調査位置図(1:5,000)



図2 調査前全景（南西から）



図3 調査風景

検出した遺構がさらに調査区外の西に延びることが判明したことから、一部西側に拡張した。

調査の結果、平安時代後期から鎌倉時代を中心に遺構・遺物を検出した。また旧高瀬川の両肩部も確認した。江戸時代の遺構面・整地層以下は氾濫による洪水層により著しく浸食を受けていたが、第2・3面のいずれも砂礫面で平安時代後期から鎌倉時代の遺構を検出することができた。今回の調査で平安時代後期から鎌倉時代の遺構が砂礫層面で検出できたことは、当地域は鴨川からの洪水氾濫の影響を受けながらも、当該期は土地利用が行われていたことが明らかになった。

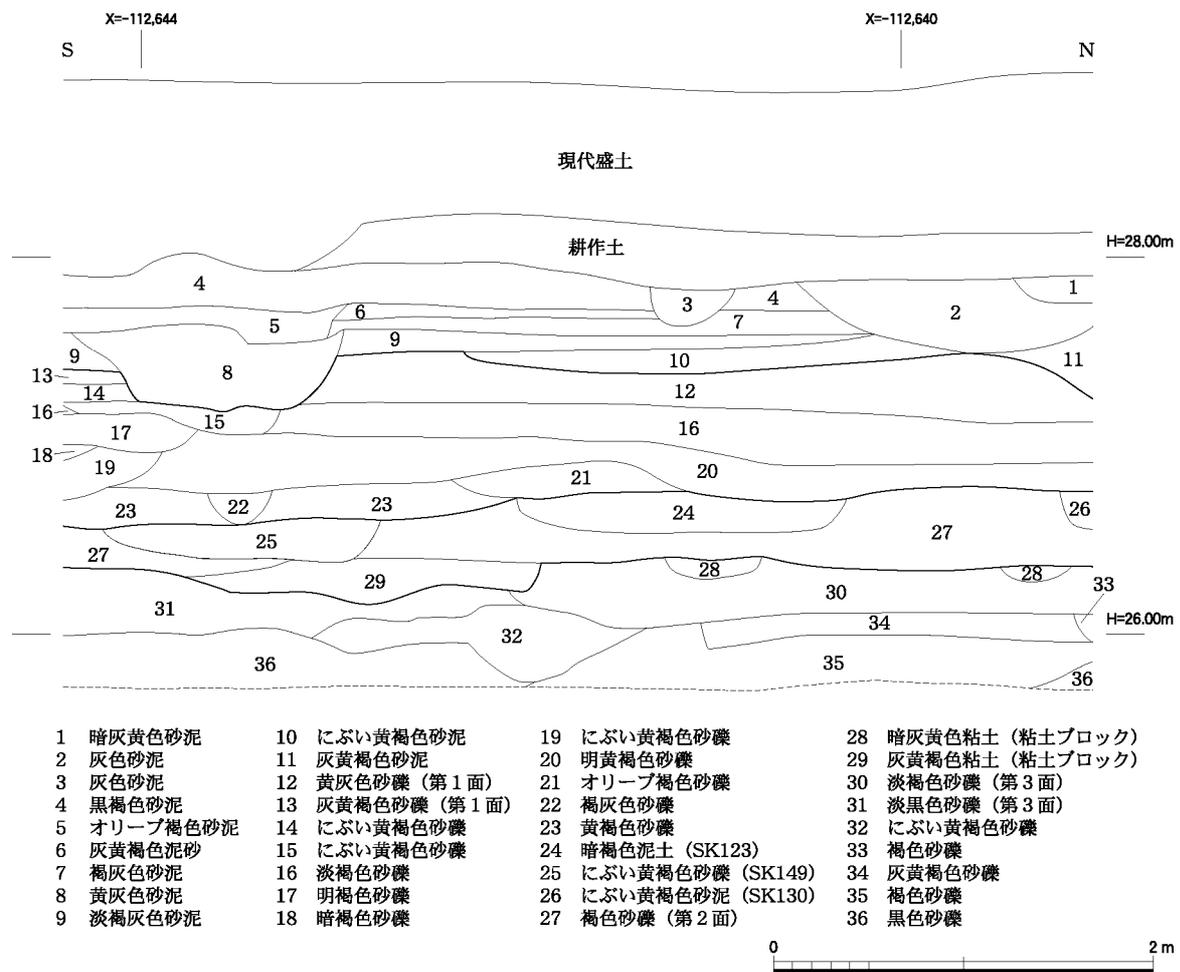


図4 基本層位図（調査区西壁、1：40）

2. 遺 構

(1) 層 序 (図4)

調査区の基本層序は、まず地表下1.0mまでが現代の盛土層で、直下に近代から現代の耕作土層、近代の整地層である第4層黒褐色砂泥層・第7層褐灰色砂泥層がみられる。第12層以下は地表下3.2 (標高25.1m)までは砂礫層が厚く堆積するが、その下は砂層とシルト層の互層である。

調査では、砂礫層を第1面から第3面の3段階に分けて行った。第1面は地表下1.5mに堆積する第12層黄灰色砂礫層と第13層灰黄褐色砂礫層の上面、第2面は地表下2.3mで第27層褐色砂礫層上面、第3面は地表下2.5mで第30層淡褐色砂礫層と第31層淡黒色砂礫層上面とした。遺構面の時期は第1面が江戸時代、第2面は鎌倉時代、第3面は平安時代後期である。

(2) 遺構の概要

検出した遺構は、第1面15基、第2面203基、第3面64基、総計は282基である。遺構の時期は平安時代後期から江戸時代までであるが、鎌倉時代の遺構が大半を占める。

第1面では江戸時代の遺構を検出した。遺構にはピット、土壇、溝、川などがある。とくに調査区南半部で検出した溝SD5は北東から南西にかけて流れる川跡で、現在も調査地の東に流れる高瀬川の旧流路とみられる。また川の北側ではゴミ廃棄用の穴とみられる土壇も検出している。

第2面では鎌倉時代の遺構を多数検出した。遺構は調査区北側の西半部に集中していた。そのため西側を拡張し、さらに新たな遺構を検出した。柱穴と土壇が多くを占めるが、柱穴についてはまとまらず、建物の復元には至っていない。土壇のなかには形状や遺物の出土状態などから土壇墓とみられるものもあったが、氾濫による洪水層の影響で窪みに砂礫・粘土ブロックが溜まったものもみられた。井戸は4基検出したが、その内2基は洪水層により上部が壊され、基底部分のみが残存していた。

第3面では平安時代後期のピット、土壇、溝を検出した。土壇、溝は北側の西半部で少数検出したが、遺構の大半は杭跡とみられるピット群であった。

以下に第1面から第3面で検出した主要な遺構について概述する。

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
平安時代後期	SK223・250・267、SD241・266、杭跡多数	第3面
鎌倉時代	SK105・145・176・216・255、SD218、SE66・97・151・158、ピット多数	第2面
江戸時代	SK3・4・7、SD5・10	第1面 SD5は旧高瀬川

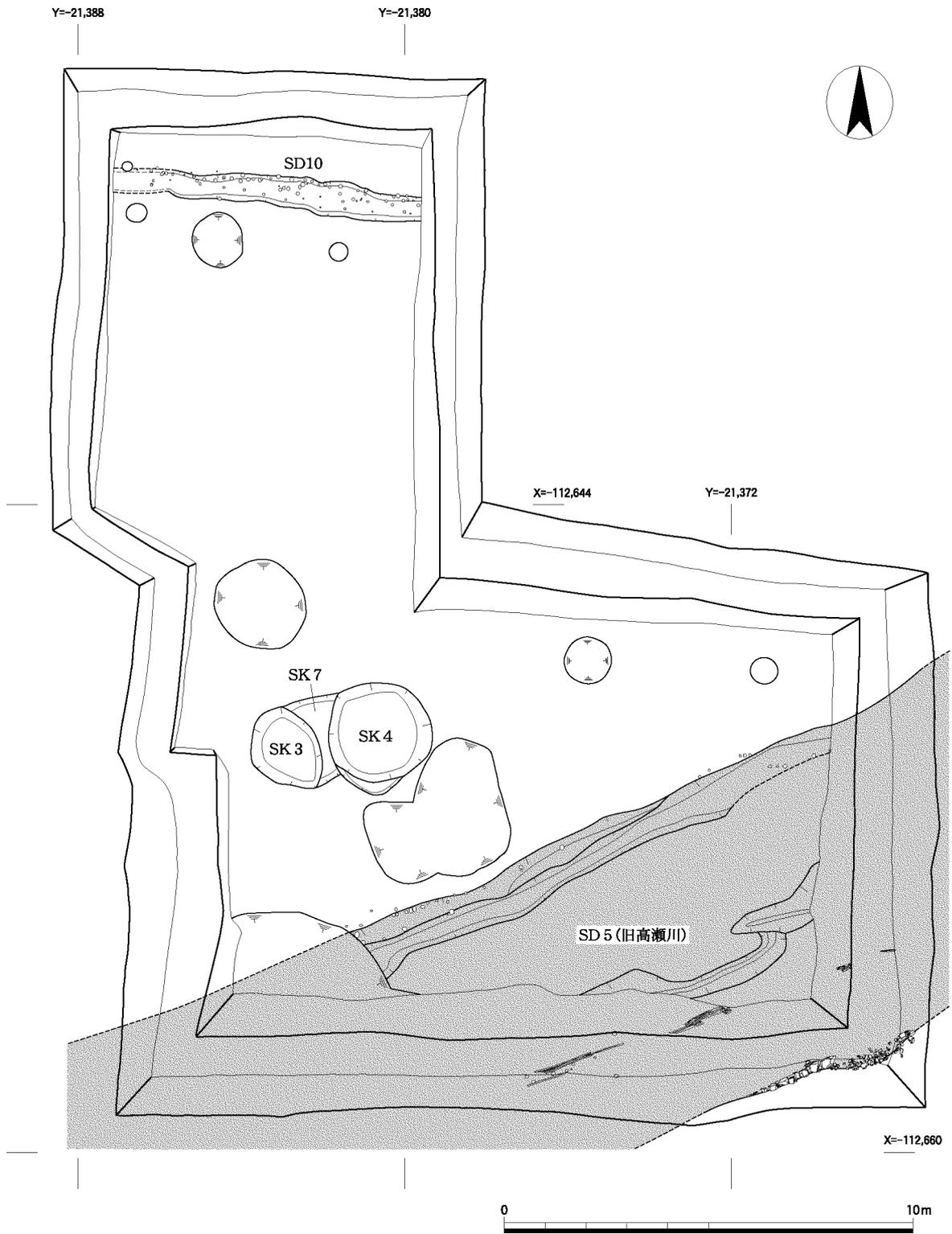


図5 第1面遺構平面図(1:150)

(3) 第 1 面の検出遺構 (図 5 ・ 6 、 図版 1)

土壌SK3 調査区南半部で検出した土壌である。規模は東西1.7m、南北2.0mのやや楕円形である。深さ0.28m。埋土は褐灰色砂泥。

土壌SK4 調査区南半部で、SK3に東接して検出した土壌である。規模は東西2.5m、南北2.8mの楕円形である。深さは0.6m。埋土は褐色砂泥。

土壌SK7 SK3・4に切られた土壌である。規模は東西1.4m以上、南北2.3m以上で、深さは0.3mである。埋土は褐色砂泥。

溝SD5 (図 6) 調査区南半部で現代盛土下0.6 で検出した旧高瀬川である。南肩部は南端部の壁面にかかる状態で検出した。全体の規模は東壁面での検出状況から、川幅は当初8.9 で、深さは2.2 、溝底は東端で標高26.5m、西端で標高26.3mで、北東から南西方向に緩やかに流れる。総延長約17 にわたり検出した。肩口は板材と杭で護岸され、南側は石垣が残存する。改修後は幅6.0 と縮小され、両肩部とも杭と板材で護岸される。出土遺物は改修後の埋土から多量に出土しており、陶磁器・染付などの日常雑器、下駄・曲物などの木製品、人形・泥面子などの土製品、鍋・釘などの鉄製品などの生活用品がある。

溝SD10 調査区の北端で検出した東西方向の溝で、延長7 を検出した。規模は幅0.3~0.5mで、深さ0.1 である。埋土は褐色砂泥。溝の北肩部に杭が密に規則性なく並び、杭の大きさも不揃いであった。溝底は東端で標高27.3 、西端で標高27.2 を測り、東から西へ緩やかに流れていたことを示している。埋土は褐灰色砂泥。

(4) 第 2 面の検出遺構 (図 7 ~ 10 、 図版 2)

土壌SK105 (図 8) 調査区の西半部で検出した土壌である。北辺と南側は他の遺構に切られていた。規模は長辺が1.2 、短辺が0.6 、深さ0.15 の方形土壌である。土壌の方位は東に約40°振れる。埋土は黒褐色砂泥。埋土の上面上には、長さ0.3~0.5mのやや角張った礫と土師器皿、

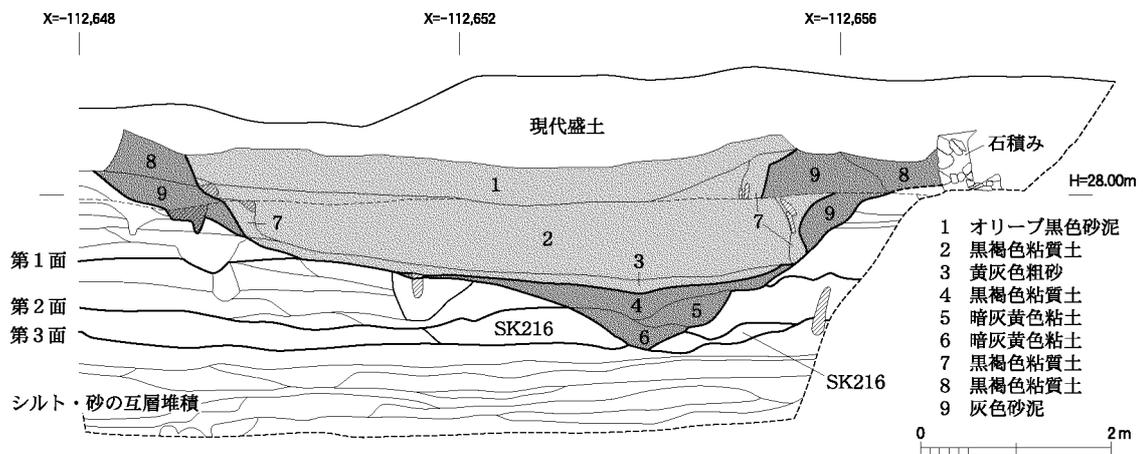
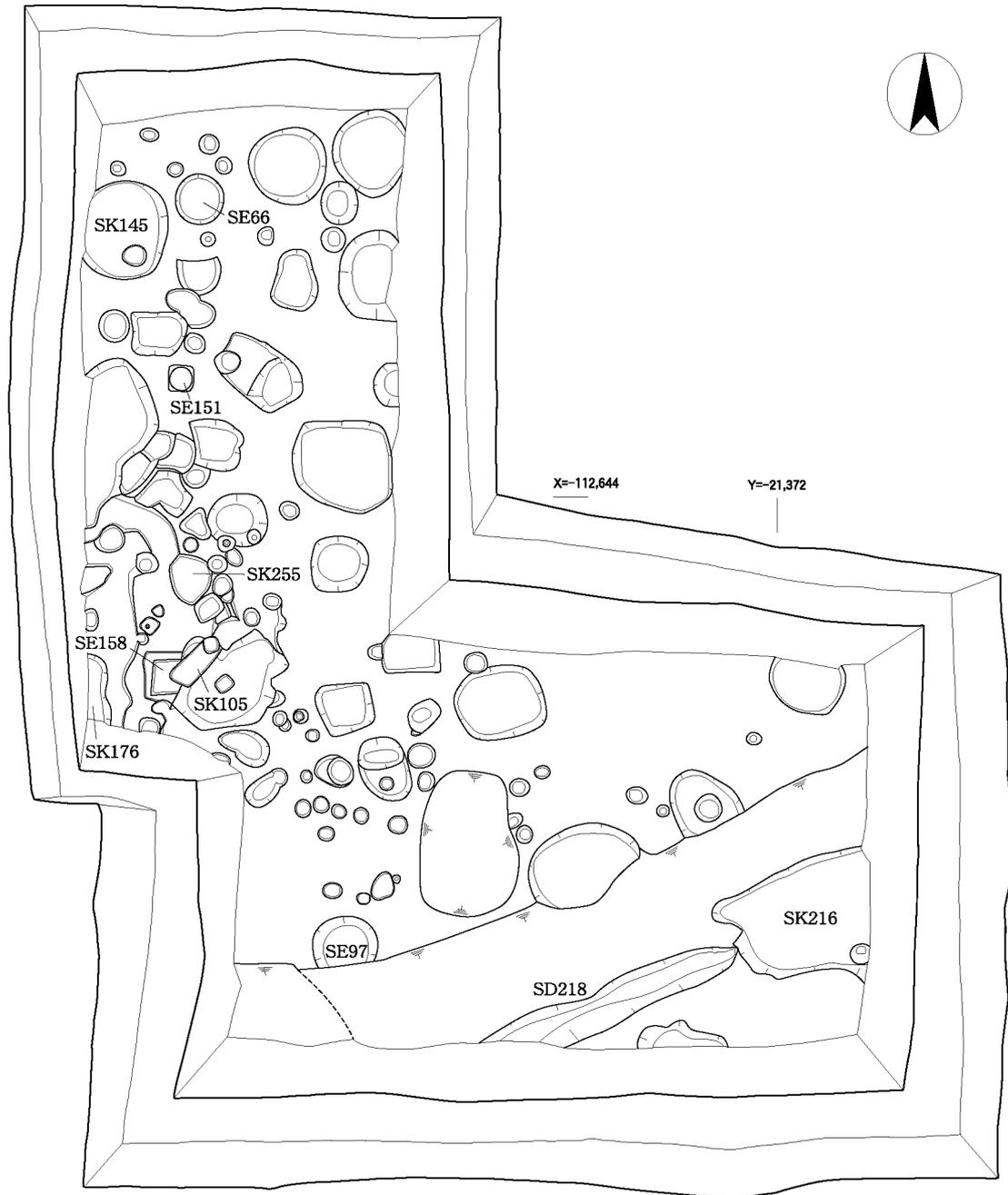


図 6 SD5 東壁断面図 (1 : 80)

Y=-21,388

Y=-21,380



X=-112,644

Y=-21,372

X=-112,660



図7 第2面遺構平面図(1:150)

瓦器鍋・釜、輸入陶磁器などが特にまとまることなく散在していた。土壌底面には薄い炭化物が広がる。また土器以外に鉄釘も出土しており、土壌の形状、遺物の出土状態からも木棺墓の可能性が考えられる。

土壌SK145 調査区の北半部で検出した土壌である。西肩の一部が調査区外に延びる。東西1.6 以上、南北2.1 の楕円形で、深さが0.1 である。埋土は褐灰色砂泥。土壌内からは土師器、

瓦器、輸入陶磁器、鉄釘などとともに宋銭「嘉祐元寶」が出土している。

土壌SK216 調査区の南東端で検出した土壌である。規模は東西3.3 以上、南北2.5 、深さ0.4 の不定形で、調査区の東外に延びる。埋土は褐灰色砂泥。土壌内からは土師器、瓦器、埴埴などが出土している。

土壌SK176 調査区の西端部で検出した土壌である。東西0.4 以上、南北1.2 、深さ0.2 の不定形で、西半分は調査区外に延びる。埋土は灰黄褐色砂泥。土壌内から土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器などとともに宋銭「嘉祐元寶」が出土している。

土壌SK255 調査区の北半部で検出した土壌である。東西0.8 、南北1.6 、深さは0.1 の不定形である。埋土は暗褐色砂泥。土壌内からは土師器、石鍋とともに宋銭「景德元寶」、「天聖元寶」の2枚が出土している。

溝SD218 調査区の南端で検出した溝である。方向は北東から南西にかけてで、規模は幅1 、深さ0.2 。延長約6 検出した。埋土は褐灰色粗砂。北東はSK216に切られるが、南西は調査区外に延びる。

井戸SE66 調査区の北端で検出した円形の素掘り井戸である。規模は径1.1 、深さ1.6 である。埋土は2層に分かれ、上層が褐灰

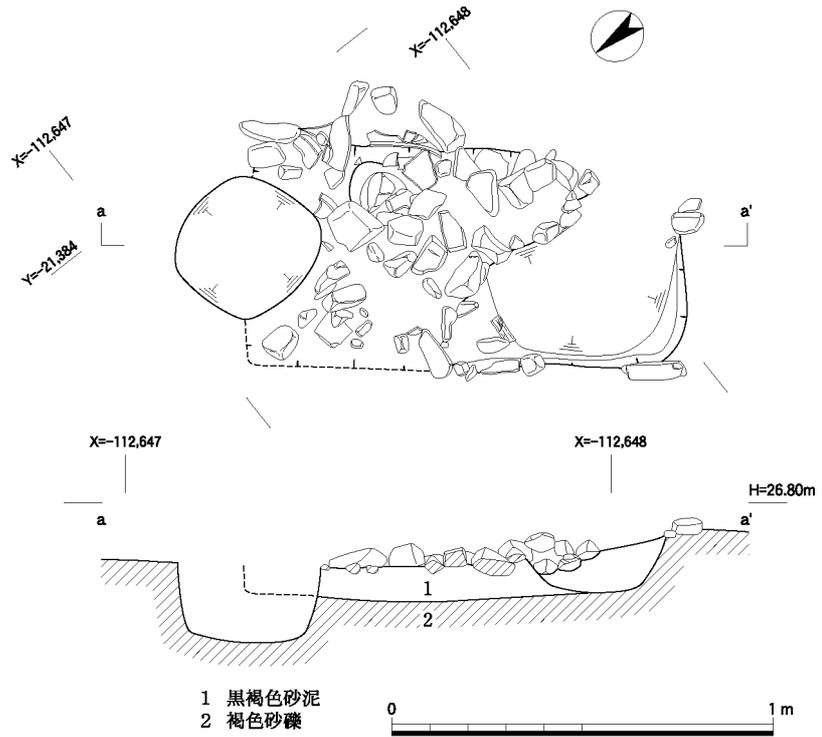


図8 SK105実測図(1:20)

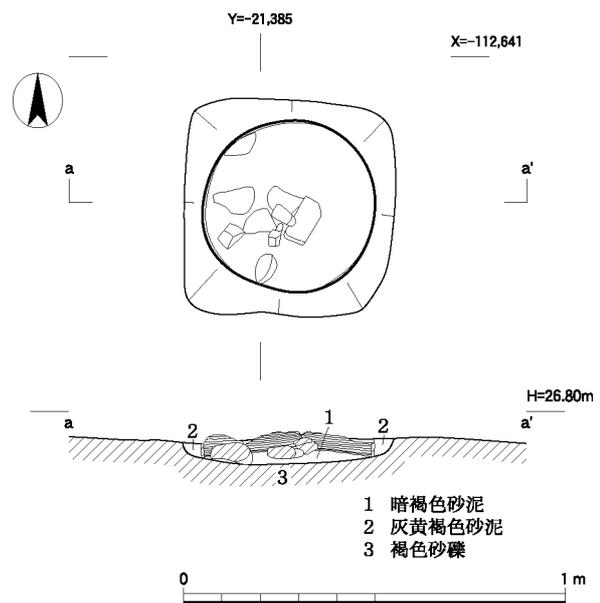


図9 SE151実測図(1:20)

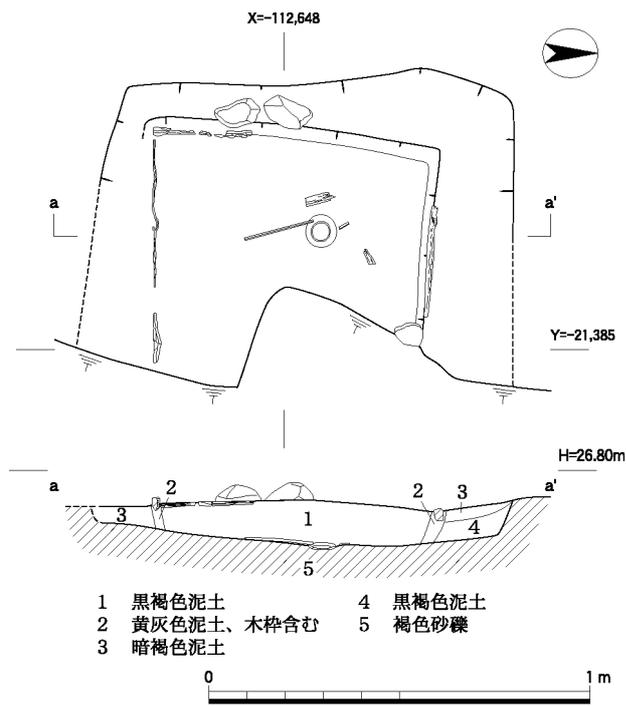


図10 SE158実測図(1:20)

色泥土、下層は褐灰色混礫泥土。下層からは土師器皿、瓦器鍋とともに宋銭「嘉祐元寶」が出土している。

井戸SE97 調査区の南半部にあたり、南辺はSD5に切られていた円形の素掘り井戸である。規模は径1.4、深さ1.0である。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰色泥土、下層は褐灰色混礫泥土層である。下層からは土師器皿が出土した。

井戸SE151(図9、図版2) 調査区の北半部で検出した井戸である。井戸側は洪水による砂礫層により破壊されていたが、井戸内の最底部に水溜り用として埋設された曲物が残存していた。曲物は底面にほぼ接して、径0.45、厚さ0.05であった。残存

状態から掘形は南北0.6m、東西0.55mの方形で、深さが0.7m。埋土は中礫を含む黒褐色砂泥。

井戸SE158(図10、図版2) 調査区の西端で検出した方形の井戸である。上部のほとんどがSE151と同様に、洪水による砂礫層に破壊されていた。また東半部はSK105に切られていた。残存状態から掘形は一辺約1.1の隅丸方形、深さ0.45である。井戸枠は方形縦板組であったとみられ、底部に最下段の横棧が残存していた。復元すると一辺が南北0.8、東西0.7mの井戸枠となる。埋土はにぶい黄褐色砂泥。井戸内から完形の土師器皿、木箸が出土した。

(5) 第3面の検出遺構(図11、図版3)

土壌SK223 調査区西半部で検出した土壌である。規模は東西1.1、南北1.3、深さ0.4の不定形である。埋土は褐色砂泥。

土壌SK250 SK223に北接して検出した土壌である。規模は東西1.7、南北1.7、深さ0.1で、やや方形に近い。埋土は灰黄褐色泥土で炭を多く含む。

土壌SK267 調査区西端部で検出した土壌である。規模は東西0.8以上、南北1.5以上、深さ0.1で、調査区の西外に延びる。埋土は暗褐色砂泥。

溝SD241 調査区西半部で検出した北東から南西方向の溝である。規模は幅0.6、深さ0.1、埋土は黄褐色泥土。北側は削平を受け、南はSK267に切られる。

溝SD266 SD241の南で検出した北東から南西方向の溝である。規模は幅0.6、深さ0.1、埋土は黄褐色泥土。北側はSK223に切られるが、南側は調査区外に延びる。

杭跡 北東から南西方向に並ぶ杭跡が2群あり、北群は20基、南群は22基の総数42基を検出した。杭跡の規模は径0.2~0.3mで、深さは0.2~0.4mである。

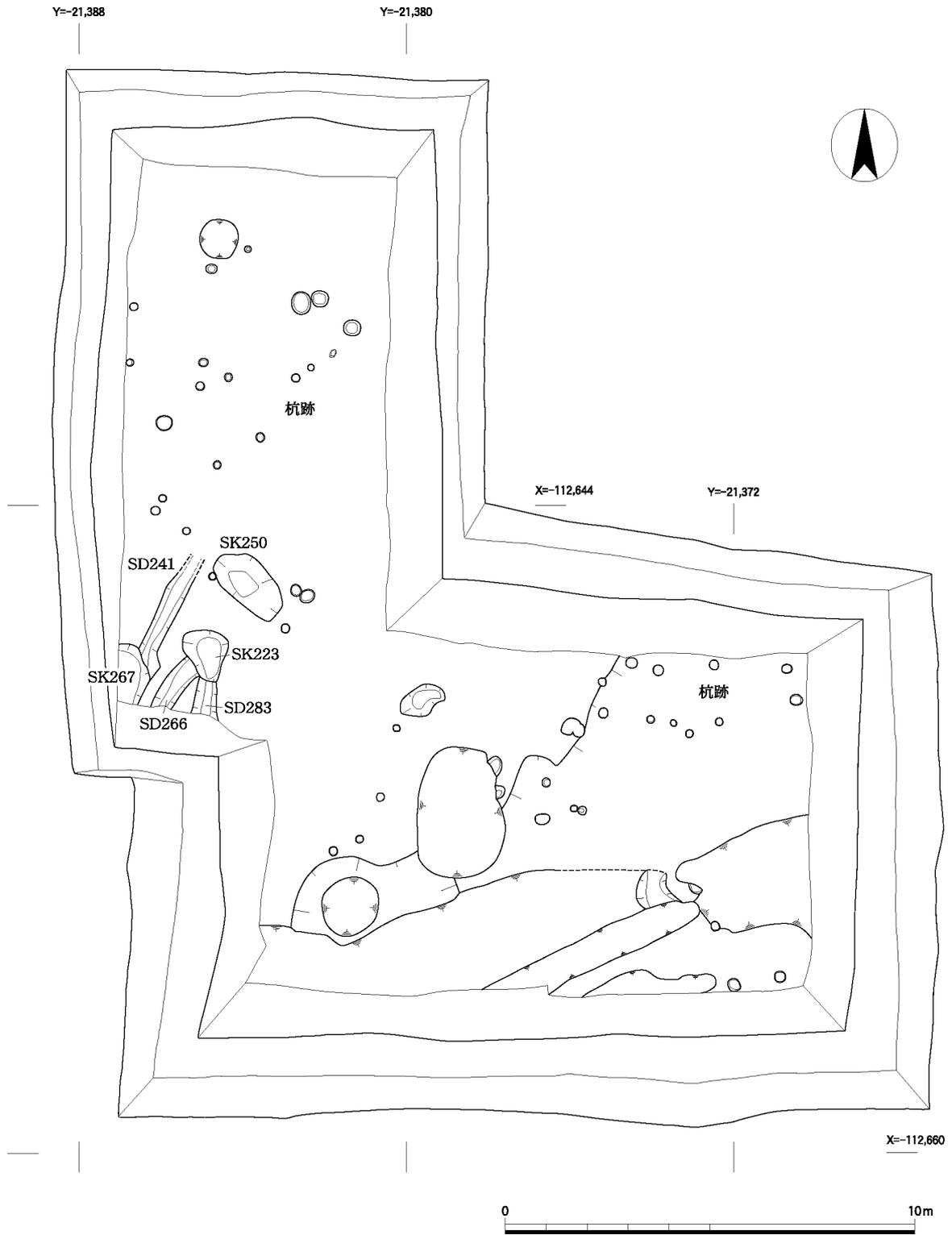


图11 第3面遺構平面図(1:150)

3. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物は整理箱で74箱ある。遺物は縄文時代から江戸時代までのものがある。時期別にみると鎌倉時代の遺物が多くを占め、次いで江戸時代の遺物が多く出土している。遺物には土器類、瓦類、金属製品、木製品、石製品、土製品などがある。器種別には土器類が最も多い。以下、第1面から第3面で検出した主要な遺構からの出土遺物と、遺物包含層（主に砂礫層）からの出土遺物、また出土銭貨についても概説する。

(2) 第1面の出土遺物（図12、図版4）

溝SD5（1～25）

出土した遺物は整理箱で8箱あり、土器類が多くを占める。土器類には土師器皿、焼塩壺身・蓋、染付、唐津・瀬戸・美濃・京焼などの陶磁器類、泥面子・人形などの土製品、下駄・曲物などの木製品、煙管・釘・鉄鍋・銭貨などの金属製品等の生活用品が多岐にわたり出土した。その内で図示できるものについて図12に示した。

土師器には皿類（1～6）、小壺（7）、焼塩壺蓋（8）、焼塩壺身（9・10）がある。皿類は小型皿が5・6で口径8.0cm、中型皿は1～3で口径8.6～10.2cm、大型皿は4で口径12cmに分けられる。いずれも18世紀後半にあたる¹⁾中期中に比定される。小壺7は口径3.0cm、高さ2.0cm。焼塩壺身9・10は、刻印は認められないが堺系とみられる。9は口径6.6cm、高さ7cm。8は焼塩壺の

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
縄文時代～弥生時代	縄文土器、石器	少量	石器4点	0箱	0箱
古墳時代	須恵器	少量	須恵器2点	0箱	0箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器、軒平瓦、平瓦、丸瓦、銭貨	8箱	軒平瓦1点、土師器1点、銭貨5点	1箱	7箱
鎌倉時代	土師器、瓦器、須恵器、輸入陶磁器、陶磁器、磁器、石製品、鉄製品	34箱	土師器29点、瓦器8点、須恵器1点、陶器1点、輸入陶磁器4点、土製品1点、石製品1点	16箱	16箱
江戸時代	土師器、陶磁器、焼締陶器、土製品、石製品、木製品、鉄製品、銭貨	34箱	土師器18点、陶器7点、土製品6点、石製品1点、木製品1点、鉄製品1点、銭貨1点	13箱	19箱
合計		76箱	93点（4箱）	30箱	42箱

コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

蓋で、口径6.6cmである。

施釉陶器には(11~14)がある。11・12はいずれも内面に灰釉を施した京・信楽系の灯明皿である。11は口径3.6cm、12は口径3.4cm。13は軟質施釉陶器の灯明皿である。回転台成形で、底部は回転糸切り。口径7.2cmで内面の見込みに圈線が巡る。また内面には透明釉が施され、中央に鉄絵で簡略化された宝珠文が描かれている。京都大学構内遺跡の出土例から19世紀代と考えられている。²⁾14は京・信楽系の灰釉陶器の蓋で、宝珠型のつまみをした蓋である。

焼締陶器には鉢(15)と播鉢(16)がある。15は堺焼の鉢底部で、外面には「さふ」と墨書が施されている。16は堺・明石系の播鉢で、内面の播り目は細かい。口径34cm。

土製品には泥面子(17~19)、独楽(20)、ミニチュア釜の蓋(21)がある。17・18はいずれも径3.4cmであるが、19は径6cmの大型品である。

石製の硯(22)は幅7.8cm、長さ4.3cm以上の方形板材に硯面と縁が加工されている。

鉄製品(23)は全体がほぼ完存している。浅い鍋状の口縁の一端に注口状のものを設ける。その内部下に楕円形の凹部を鍛造し、外面底部に板状の把手がほぼ中央部に付く。外面底部に2箇所突起状の足を配置している。内面に炭化物が付着していることから、灯火具の可能性が高い。

木製品には差し歯下駄(24)がある。隅丸長方形の板材に鼻緒孔3箇所を穿つ。前壺左側に指圧痕が残る。歯は欠落している。

土壙SK4(25~34)

土壙内から出土した遺物は整理箱で9箱あり、土器類が多くを占める。土器類には土師器、染付、唐津・瀬戸・美濃・京焼などの陶磁器類、埴塼も出土している。

土師器には皿類(25~27)、鉢(28)、蓋(29)、小壺(30)、焼塩壺蓋(31)、焼塩壺身(32)がある。皿類は小型皿が25で口径6.4cm、中型皿が26で口径7.6cm、大型皿が27で口径9.6cmに分けられる。いずれも18世紀末~19世紀前半にあたる中期新に比定される。28はロクロ成形の小型鉢である。口径8.6cm、高さ2.9cm。29は蓋で口径11.2cm、高さ5.3cmで半球形状を呈する。内面には指押さへの圧痕が明瞭に残る。30は小壺で、口径が1.0cmと7よりは小型である。32は内面にハケ目調整が密に施されている焼塩壺身で、口径6.4cm、高さ6.5cm。31はその蓋で口径6.6cm。

陶器には信楽焼の植木鉢(33)がある。底部中央が穿孔され、外面には緑灰色の釉が施されている。また底部外面には「イロハ」とみられる墨書が施されている。

埴塼(34)は外面全面に銅宰が付着。内面は剥離し黒く変色している。径が16.6cm、高さ21.3cmの大型品である。

(3) 第2面の出土遺物(図13、図版5)

土壙SK105(35~49)

土壙内から土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、鉄釘が出土している。なかでも瓦器鍋・羽釜が多い。実測可能な土器については図13で示した。

土師器には皿類(35~39)と羽釜(40)がある。皿類は小型皿が35・36でいずれも口径8cm、

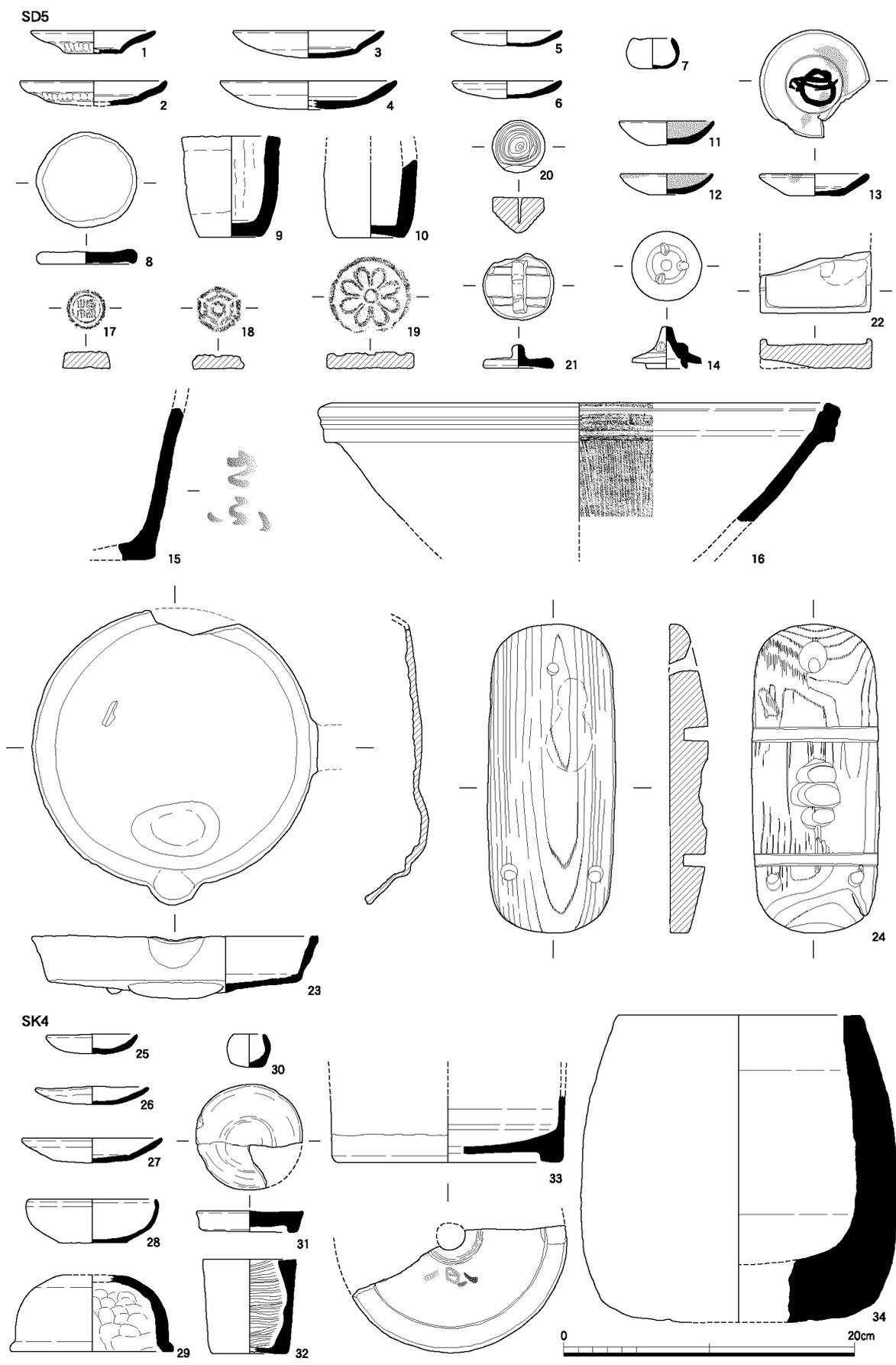


图12 第1面出土遺物実測図(1:4)

中型皿は37で口径12cm、大型皿は38・39で口径14.2cm・15.4cmに分けられる。これらの土師器皿は13世紀後半～14世紀前半にあたる 期中～ 期古に比定される。40はミニチュアの羽釜の完形品である。口径7.4cm、高さ2.7cm。

焼締陶器には常滑焼の甕（41）がある。口径は推定で46cm、端部は上方に立ち上がり、そのまま収める。12世紀末～13世紀前半の製品で混入品と思われる。

輸入陶磁器には白磁椀（42）と青磁椀（43）がある。白磁椀は口縁端部が肥厚する華南産の製品である。残存する口縁部から口径は16cm。青磁椀は蓮弁を配置した龍泉窯系の製品である。残存する口縁部から口径は16.6cm。

瓦器には羽釜（44・45）、鍋（46～49）がある。44・45は羽釜で44は口径22cm、45は口径20.4cmで、いずれも口縁部が内傾している。45は鏝がやや上方斜めに延び3.5cmと長い。鍋は口径が31.2～32cmの大型のもの48・49と、口径25cmの中型のもの47、口径21.6cmの小型のもの46がある。いずれも受け部は「く」字形を呈する。体部外面はオサエ調整、体部内面は46・47はハケ目調整が明瞭に残る。

土壙SK216（63～71）

土壙内から土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦が出土した。

土師器には皿類（68～68）と鉢（69）がある。皿類は小型皿が63～66で口径7.8～9.8cmで、中型皿は67・68で口径12cmである。これらの土師器皿は13世紀後半～14世紀前半にあたる 期中～ 期古に比定される。鉢69は大きく開く体部をもつ。外面には粘土紐の輪積みの痕跡が明瞭に残る。口径は13cm。

瓦器椀（70）は内外面共に磨滅している。口径は15cm。

埴塼（71）は口径10cmで、器壁が厚く半球形を呈する。内外面ともに剥離しているが、外面にはナデ調整の痕跡がみられる。

井戸SE66（52～62）

井戸内からは土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器が出土している。

土師器には皿類（52～61）がある。小型皿は52～57で口径8～9cm、中型皿は58で口径12cm、大型皿は59～61で口径14～15cmである。これらの土師器皿は13世紀後半～14世紀前半にあたる 期中～ 期古に比定される。

瓦器鍋（62）は口径が19cmの小型鍋で、受け部は内弯気味に収める。

井戸SE97（51）

井戸内から土師器皿、須恵器甕が出土した。

土師器皿（51）は口径13.4cmで、やや大型の皿である。13世紀後半にあたる 期中に比定される。

井戸SE158（50）

木柵内の底から完形の土師器皿と木製箸が出土した。土師器皿（50）は口径8.5cmの小型皿である。13世紀末にあたる 期新に比定される。

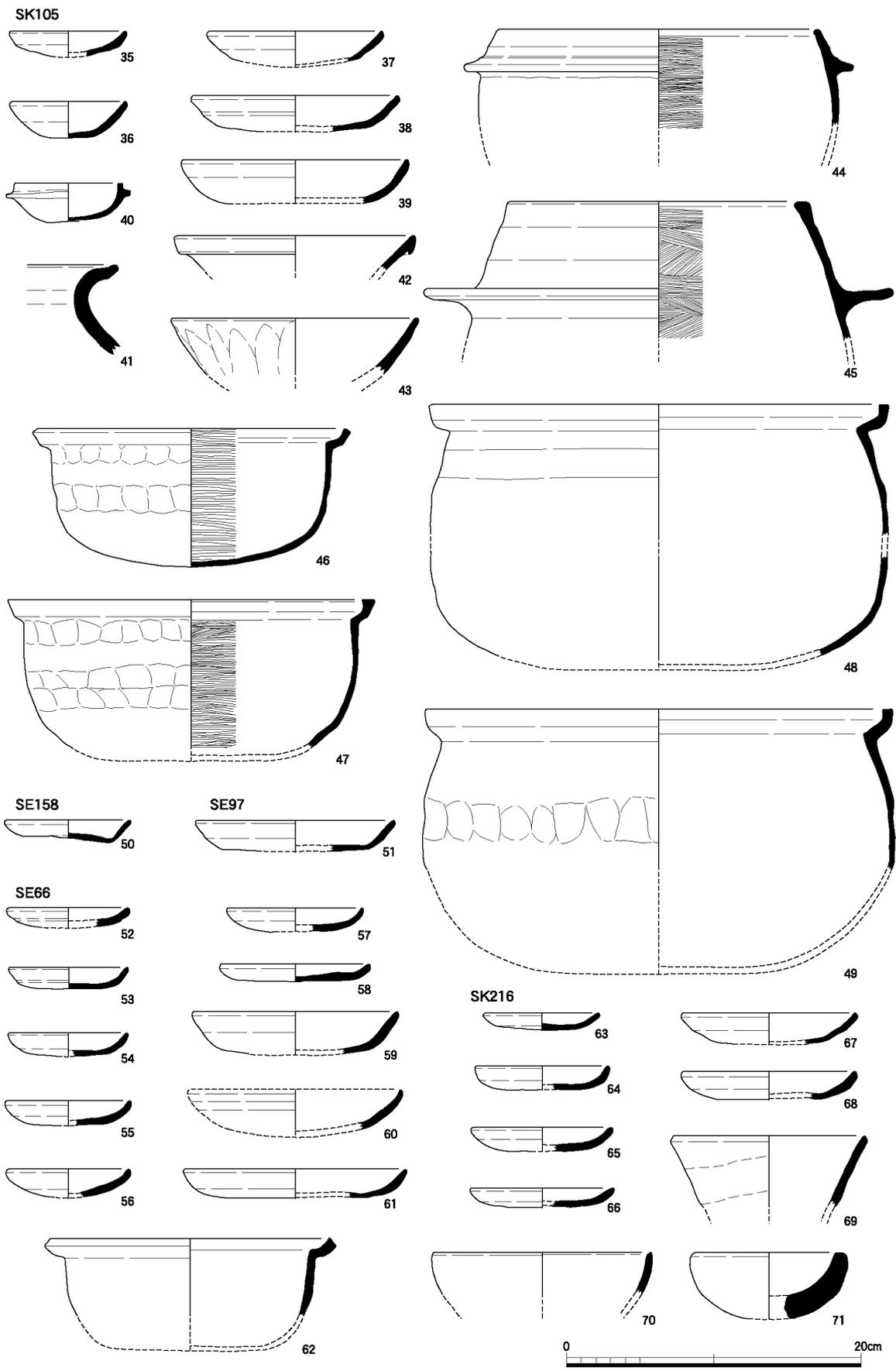


图13 第2面出土遺物実測図(1:4)

(4) 遺物包含層の出土遺物 (図14・15、図版 6)

褐色砂礫層 (72 ~ 83)

第 2 面を形成している褐色砂礫層からは土師器、須恵器、輸入陶磁器、軒瓦、石製品などが出土した。砂礫層から出土した遺物は、洪水の影響による磨滅は認められなかった。

土師器には皿類 (72 ~ 76) がある。72 は小型皿で口径 9 cm、75 は中型皿で口径 12 cm、73・74・76 は大型皿で口径 13.6 ~ 14.8 cm である。72 ~ 75 は 12 世紀末 ~ 13 世紀後半にあたる 期古 ~ 期古に比定される。76 は古く、10 世紀後半にあたる 期中に比定される。

須恵器には椀 (77) と杯蓋 (82・83) がある。77 は口径 17 cm、高さ 4.5 cm。底部は糸切りで平坦な輪高台を貼り付けている。82 は口径 12 cm、高さは 4.0 cm。天井部は平坦で稜線はやや丸味をおび、大きく突出する。天井部の外面は時計回りの回転ヘラ削り、内面は横ナデ調整を施す。陶邑編年の時期区分から、5 世紀後半 ~ 6 世紀前半にあたる TK23 型式 ~ TK47 型式に比定される³⁾。83 は口径 13 cm、高さは 4.3 cm。天井部は平坦で稜線は斜め下方に鋭く突出する。天井部外面は時計回りの回転ヘラケズリ後、カキ目調整を施す。内面はナデ調整を施す。時期は 82 より古く 5 世紀中頃 ~ 後半にあたる ON46 型式に比定される。

輸入陶磁器は白磁椀 (78) と華南三彩陶器鉢 (79) がある。白磁椀は口径 16.6 cm で白色の釉が

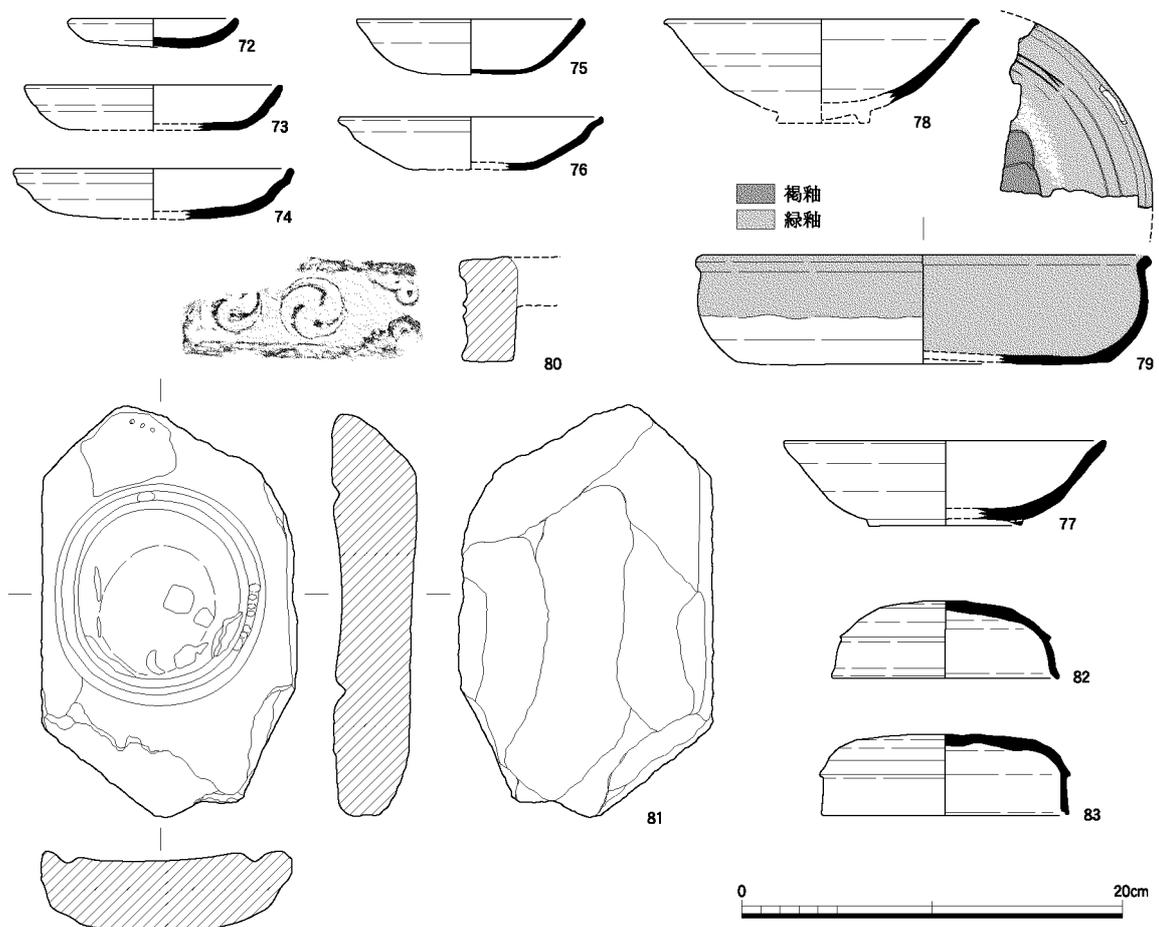


図14 褐色砂礫層出土遺物実測図 (1 : 4)

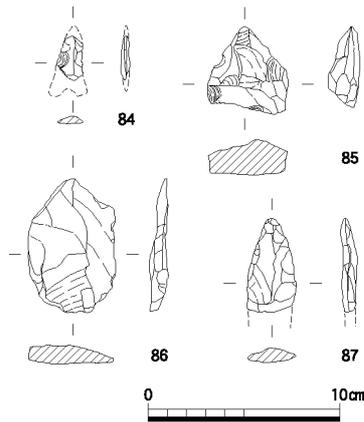


図15 黒色砂礫層出土石器実測図
(1:4)

全面にかかる。三彩陶器鉢は口径23.6cm、高さは6cmある。口縁部は外反し端部はやや玉縁状。底部は平底である。外面上半から内面にかけて緑釉が施されている。内面底部には花文が線刻され褐釉が施されている。⁴⁾

軒瓦は特殊な形態の軒平瓦(80)がある。瓦当面の形状は端部の反りが少なく直線的である。平瓦部は欠損しているが接合部の痕跡はみられる。文様は中心に半截花文を置き、左右に巴文を2つ配置する。類似した製品が六勝寺で出土している。⁵⁾

石製品(81)は板状の緑泥片岩のほぼ中央部に円形面が造り出されている。面上には研磨痕が残る。研磨痕は円形外の上

方に達している。円周縁には窪みが巡る。縁辺部3辺は面取りされ、自然石の形状を活かし変則の七角形を呈する。用途は不明であるが石硯の可能性が高い。

黒色砂礫層(84~87)

最下層にあたる鉄分を多量に含む砂礫層から、石器(84・87)、石材とみられる剥片(85・86)、縄文土器片数点が出土した。84はチャート製の打製石鏃片とみられ、長さは2.3cm残存している。87は木葉形に薄くつくられた尖頭器の先端部である。長さは5cm以上、幅2.6cmである。サヌカイト製。85はチャートの剥片である。一部に加工痕がみられるが、長さ4.6cmで先端が尖る。幅4.1cm、厚さ2.0cmと厚い。86はサヌカイトの剥片で、長さ7cmの不定形。幅4.5cm、厚さ1cm。

(5) 出土銭貨(図16)

出土した銭貨は16枚であった。銭貨の大半は緑青により判読が困難であった。緑青の除去作業の結果、判読可能なものにつき拓影し、図16に示した。出土銭貨は北宋銭がほとんどである。

88は「景德元寶」。初鑄年は景德2年(1005)。書体は楷書。裏面は無銘である。斜め上方の一部が欠損している。径2.3cm。89は「天聖元寶」。初鑄年は天聖元年(1023)。書体は楷書。裏面は無銘である。ほぼ完形で径は2.4cm。88・89ともに第2面土壌SK255から出土。90・91は「嘉祐元寶」。初鑄年は嘉祐年間(1056~63)。いずれも裏面は無銘。90の書体は楷書。斜め上方と下半の一部が欠損している。径2.3cm。第2面土壌SK176から出土。91の書体は篆書。下半の一部

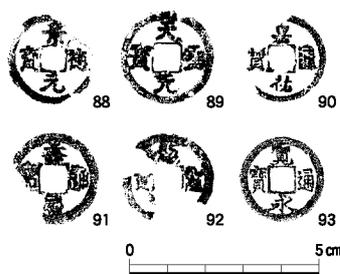


図16 銭貨拓影(1:2)

が欠損している。径2.4cm。第2面土壌SK145から出土。92は「紹聖元寶」。初鑄年は紹聖元年(1094)。書体は篆書。径2.3cm。元と寶の一部が欠損している。中央の方孔も下辺が欠損。褐色砂礫層から出土。

93は「寛永通寶」である。形状は径2.3cmの円形で、中央には方孔が穿たれている。裏面は無銘で無文。いわゆる「新寛永」で3期にあたる。第1面溝SD5から出土。⁶⁾

4.まとめ

今回の調査では各砂礫層上面に平安時代後期から江戸時代の遺構が残存することが判明した。砂礫層は第1面（江戸時代）以下に厚く堆積しており、第2面（鎌倉時代）、第3面（平安時代）に遺構が残存する。以下に判明した成果を概観しておく。

第1面で検出したSD5は江戸時代に開削された高瀬川である。高瀬川は慶長16年（1611）に、角倉了以とその子素庵により開かれた、京と伏見間の物資輸送に利用された運河である。大正4年（1915）に改修が行われて、現在の位置に付け替えられ運河としての機能を失い、大正9年（1920）には廃止されている⁷⁾。今回の調査で検出したSD5は、大正4年に現在の位置に改修される以前の旧高瀬川の一部である。寛永十四年の絵図では北東からの流れがそのまま南西方向に延びている様子が図示してある⁸⁾。SD5から出土した内面に鉄絵で宝珠文が描かれた軟質施釉陶器の灯明皿は、類似品が京都大学病院構内から窯道具と共に出土し、二代目乾山・猪八がかかわったとされる聖護院窯の製品と考えられており⁹⁾、その流通を考える上で興味深い。

また、調査区の北端で検出したSD10は北肩に杭を不規則に密集して打ち込んだ東西溝で、その状態からみると矢板が備わっていた可能性が高く、高瀬川の増水による洪水を防ぐための水害対策としての機能が考えられ、北側に居住地の存在が窺われる。

第2面は鎌倉時代前期の後半から後期の遺構が中心である。近接地の調査例をみると、今回の調査地と高倉通を挟んだ西側のマンション建設に伴う発掘調査で、平安時代から中世の遺構・遺物を多数検出している¹⁰⁾。今回の調査では鎌倉時代前期の木柵井戸の基底部2基と素掘りの円形井戸2基を検出した。また土壌を多数検出しているが、氾濫による洪水の影響も大きく、窪みに砂礫が落ち込んだもの、ブロック状の粘土が流され溜まったものもあり、遺構としての判断は難しいといえる。ただ、出土遺物は流れの影響による磨滅は少なく、いずれも投棄されたような状態で出土している。近接地の高倉小路から西には、職人町「八条院町」が展開している。八条院町は現在の京都駅構内を中心地で、駅開発に伴う調査では鎌倉時代を中心に鏡・仏具・刀装具・銭貨にかかわる職人町に関連する遺構群と墓域も検出されている¹¹⁾。今回検出した土壌・井戸などから出土した遺物は、鎌倉時代後半の土器類が主体であったが、それに伴い金属製品とくに鉄釘、銭貨なども出土している。また砂礫層からは華南三彩や大型の石硯かと思われる特殊な石製品なども出土していることも併せると、当地域も「八条院町」にかかわる何らかの施設が存在していた可能性が高いといえる。

第3面は平安時代後期の遺構を検出している。平安時代中期から後期は鴨川の洪水発生回数は平安時代の中でも最も高く、水害が多かった時期にあっており¹²⁾、遺構の残存状況はそのことに関連していると思われる。杭跡群が不規則に点在するが、北西から南東方向の氾濫による洪水を意識しているようにもみられる。また西半部で検出した溝や土壌は氾濫による洪水からの流失を免れて残存した遺構である。溝については北側の延長部は消失しており、当地における洪水の実態を示している。

この一帯は、平安時代以前に鴨川の氾濫による洪水層により氾濫原が形成され、その後も断続的に洪水があったことが試掘・立会調査などで確認されている¹³⁾。しかし氾濫原の範囲については明確ではない。当地の南から東九条地域では、氾濫堆積に囲まれ中洲状の範囲に平安時代から室町時代の遺構が確認されている。また八条通高倉西から九条河原町付近には弥生時代から古墳時代の烏丸町遺跡¹⁴⁾が広がる。さらに高倉小路より西には「八条院町」の遺構群が残存している。それらの調査状況から当地は氾濫堆積の西限境界部にあたり、江戸時代の高瀬川がその境界部に開削されたとも考えられる。検出した遺構群は高瀬川以北にあたることから推考すると、当地点よりさらに以北に遺跡の中心部が存在することが予想される。

註

- 1) 出土土器の編年の形式は以下の編年案による。
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年の研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) 千葉豊「乾山騰陶と軟質施釉陶器 京都大学構内遺跡出土資料」『軟質施釉陶器の成立と展開』関西陶磁史研究会 2004年
- 3) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年
- 4) 根津美術館学芸部『華南のやきもの』根津美術館 2000年
- 5) 網 伸也ほか「成勝寺跡」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 6) 永井久美男編『日本出土銭総監 1996年版』兵庫県埋蔵銭調査会 1996年
- 7) 「高瀬川」『京都市の地名』平凡社 1979年
- 8) 宮内庁書陵部編『洛中絵図』寛永十四年七月二日 東京 1969年
- 9) 千葉豊「乾山騰陶と軟質施釉陶器 京都大学構内遺跡出土資料」『軟質施釉陶器の成立と展開』関西陶磁史研究会 2004年
- 10) 2001年3月12日から6月30日まで東洞院通七条下る塩小路町524-1で関西文化財調査会によりマンション建設に伴う発掘調査が行われた。調査の結果、江戸時代の火葬墓をはじめ、桃山時代御土居の基底部、平安時代後期から室町時代の遺構群を検出した。また湿地状堆積から漆紙文書が出土している。概報報告書は本年5月には刊行が予定されている。
- 11) 上村和直「京都八条院町をめぐる諸問題」『研究紀要8号』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 12) 河角龍典「平安京における地形環境変化と都市的土地利用の変遷」『考古学と自然科学』第42号 日本文化財科学誌
勝山清次「平安時代における鴨川の洪水と治水」『人文論叢 三重大学人文学部化学科研究紀要第4号』三重大学人文学部 1987年
- 13) 「平安京左京八条四坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
鴨川の堆積土層である砂礫層を確認する。砂礫層から磨滅した須恵器片、土師器片が出土する。平安時代の遺構は確認できない。
- 14) 「平安京・烏丸遺跡隣接地」『京都府埋蔵文化財情報』43号 (財)京都府埋蔵文化財情報 1999年

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうはちじょうしぼうななちょうあと							
書名	平安京左京八条四坊七町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報							
シリーズ番号	2003-11							
編集者名	加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2004年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうさきょう 平安京左京 はちじょうしぼう 八条四坊 ななちょうあと 七町跡	きょうとししもぎょうく 京都市下京区 こいなりちょう・ 小稻荷町・ かみのちょう 上之町	26100		34度 59分 03秒	135度 45分 57秒	2003年9月 16日～2003 年12月26日	430㎡	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平安京左京 八条四坊 七町跡	都城跡	縄文時代 ～弥生時代		石器				
		古墳時代		須恵器				
		平安時代	土壇・溝・杭跡	土師器・軒平瓦・銭貨				
		鎌倉時代	土壇・溝・井戸	土師器・瓦器・須恵器 ・輸入陶磁器・石製品 ・土製品				
		江戸時代	土壇・溝	土師器・施釉陶器・焼 締陶器・銭貨・土製品 ・石製品・木製品・鉄 製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-11

平安京左京八条四坊七町跡

発行日 2004年3月31日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 075-256-0961